

## 地域における男女共同参画への阻害要因の個別性の解明 —熊本県を事例として—

鈴木えり子（法政大学大学院 政策創造研究科）

Keyword： 男女共同参画 性別役割分業意識 文化的自己観 自律性 多様性

### 【問題・目的・背景】

人口の減少、労働力不足、少子高齢化、社会的・経済的活力の格差の広がりといった地域における課題の解決に資するために、男女が性別にかかわらず活躍できる男女共同参画の視点が求められている。しかし、地域によって女性活躍の度合に差があり、その要因は一律ではないことを認識する必要性が指摘される（「男女共同参画白書 2015 年版 特集 地域の活力を高める女性の活躍」）。つまり、女性の就業に地域の子育て環境や、価値観、働きやすさなどの要因がどう作用しているかを検討することの必要性は大きく（武石, 2007）、地域における男女共同参画の影響要因を検討するためには、環境や制度だけではなく、地域個別の価値観に注目することが重要である。しかし、一つの地域を例にして検証された先行研究は管見のかぎり見られない。

そこで、本研究では熊本県を事例として、男女共同参画推進の意識的な阻害要因の個別性を明らかにする。熊本県の人口は2017年約176万6千人で前年比約9千人減少し、2045年には約144万人と予測される。2015年の高齢化率は28.8%（全国26.6%）で年々増加傾向にある。さらに、生産年齢人口の県外への流出による労働力不足は深刻な問題であり、その構造は県外への大学進学とその後の県外就職や世帯形成、高校卒業時の県外就職という3つの機会で生じ固定化している。震災後の2016年には、47都道府県中最大の人口流出を記録した（齋藤他, 2017）。このような背景の中、熊本県は2015年に全国で初めて参加団体が共同で進める女性活躍戦略を策定した。「男女がともに自立し支え合う、多様性とんだ活力ある社会の実現」に向けて「固定的性別役割分業意識のない社会」を目指して施策の実行に取り組んでいる。しかし、進んでいるとは言い難い要因として、熊本県の歴史文化に基づく男女の根強い価値観が影響を与えているのではないかと考える。地域に根づく価値観とは、歴史文化に基づき長い時間の中でつくられた地域個別の意識である。熊本には性別に基づいた他者や社会へのかかわり方に関する認識の特徴が存在している。男性について、『もっこす』（心

に秘めて、外には出さない熊本男子の男気を表すが、偏屈で頑固、融通が利かない強情者ともいわれている」（小林, 2008）と言われる。他方女性は、『肥後猛婦』（明治以後、男性中心の日本社会に根をおろした悪徳と悪習に挑戦するために、陣頭指揮をした女性将軍たちの多くは熊本出身である（大宅, 1967）。その戦いは「男尊女卑の枠の中で、忍従の生活を強いられた悩みと模索の中であったからこそである（熊本黎明期の女たち熊本市）」と表現される。さらには、『肥後の引き倒し』『肥後の議論倒れ』（肥後人はよってたかって足をひっぱり結局一人も成功しない。要するに「おれがおれが」が多いものだから話がまとまらない（渡辺, 2012）。

このような歴史文化の中で形成された地域固有の価値観は、現在においても人々の意識に影響を及ぼしていると考えられる。例えば、熊本県や市で実施したアンケート結果では次のような表記がみられる。「関東から熊本へ引っ越してきて、男尊女卑の風潮を感じた」「熊本は肥後もっこすと言われるように頑固な男がいる」「なぜ偉そうにしている男性が多いのか」「夫の転勤で全国6カ所回ってきたが、熊本は女性の方が『女性は家事、育児の全面的負担をして当たり前』という固定的な性別役割分担意識を持っている人が非常に多いと思う」など（熊本市男女共同参画に関する市民意識調査報告書 熊本市 2009, 2014年 自由記述）。ところが、「2015年内閣府男女共同参画局 地域における女性の活躍に関する意識調査」では、熊本県は他県に比べ、家事育児肯定や女性活躍否定者割合は男性が低く、女性が高いという結果を示している。このように、熊本県で地域特有の価値観として根付いている『肥後もっこす』『肥後猛婦』『肥後の引き倒し』は、性別に基づく他者や社会に対する自己の認識であるといえ、男女共同参画の阻害要因との関係が推察される。さらに、熊本県市行政の意識調査と内閣府男女共同参画局内閣府アンケート調査結果の乖離には、前述のような熊本個別の心理的要因の影響が考えられる。

以上のような理由から、熊本県の男女共同参画推進の心理的阻害要因の実態の解明を行うことにより、先

行研究に指摘されているように地域個別の価値観が男女共同参画に作用していることを明らかにすることができると考える。

**【研究方法・研究内容】**

**1. 研究方法**

男女共同参画推進の阻害要因である性別役割分業意識に、自己の他者や社会へのかかわり方の認識がどのような影響を示すかを、熊本と全国の比較を通して検討を行う。

**2. 調査方法**

2017年10月4日から10月10日に全国男女の被雇用者(20~65歳)に対し、株式会社マクロミルを通じてWebによる質問紙調査を行い、全国521、熊本305名、合計826名の結果を得た。全国と熊本の年齢割合は、総務省統計局 雇用形態別雇用者数を基に算出した年齢別人口割合に準じた。県別割合を表1に示す。

表1 回答者県別割合

回答者	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山
N	37	7	3	8	2	2	5	9	5	8	29	34	67	43	8	3
%	4.5	0.8	0.4	1.0	0.2	0.2	0.6	1.1	0.6	1.0	3.5	4.1	8.1	5.2	1.0	0.4
回答者	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取	島根
N	2	1	1	5	7	12	34	5	5	14	49	23	6	4	4	2
%	0.2	0.1	0.1	0.6	0.8	1.5	4.1	0.6	0.6	1.7	5.9	2.8	0.7	0.5	0.5	0.2
回答者	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	全体
N	9	11	4	5	6	7	2	17	1	8	305	0	0	5	2	826
%	1.1	1.3	0.5	0.6	0.7	0.8	0.2	2.1	0.1	1	36.9	0	0	0.6	0.2	100

**3. 質問紙の構成**

以下①~③の先行研究をもとに作成し、全て7件法(すごくあてはまる7~全く当てはまらない1)で行った。

① **性別役割分業意識**：「男は外で仕事、女は家庭で家事育児を行うべきである」だけでなく、愛情「母性愛」を媒介として性別と適性・役割を結びつける意識を加えて測定されるものであると論じられた(大和, 1995)。

さらに就業機会や職場、その他一般社会における男女平等や性別役割態度もあると指摘された(山口, 1999)。

② **文化的自己観**：社会の中で個人に課される課題、自己にとっての他者への役割、自尊心の基盤等の広い範囲に及ぶと考えられ、ある文化において歴史的に共有された自己についてのひとつの理論として定義された(北山, 1995)。高田(2000)は、「文化的自己観」として、相互独立的自己観・相互協調的自己観の個人差を測定する尺度を作成し、信頼性と妥当性を確認した。

③ **キャリア動機**：金井他(1991)は、「女性差別的な風土」「家事との両立」の2つの女性特有なストレスが意識低下などを生むと指摘し、その調整要因としてのキャリア動機などの因子を見出した。

**【研究・調査・分析結果】**

尺度分析を行うために3つの項目群(性別役割分業意識・文化的自己観・キャリア動機)ごとに因子分析(主因子法、Promax回転)を行った。

**1 因子分析の結果**

① **性別役割分業意識**

各因子を構成する項目の平均得点を算出して、信頼性係数(α)を算出したところ、「女性の固定的役割肯定」は.90、「男女共同参画への反対」は.70、「女性の家庭への愛情肯定」は.87である。

表2-1 因子分析：性別役割分業意識

	1	2	3
女性は家庭の管理をし、国家や政治の事は男性にまかせておけばよい。	.78	-.07	-.07
職場では男性がリーダーシップを発揮し、女性が補助や心配りすることで仕事が行うべきである。	.75	.09	.03
子どもを産んでから女性は一人前になれる。	.70	.03	-.14
子どものいる女性は、仕事上の成功はあきらめなければならない。	.70	-.10	-.17
国や地域や会社などで重要な決定をする仕事は、女性より男性に適している。	.65	.06	.11
男・女の世話を介するのには、妻の役割である。	.65	-.08	-.08
重要な仕事をもついても、やはり女性の専任するべき場所は家庭だ。	.60	-.02	.20
女性は職業を持っていても、まず育児と家事を自分の仕事と思うべきだ。	.58	-.01	.24
妻が料理やそうじをやれば夫が家族のために金を働かせるべきだ。	.49	-.07	.33
女性は家庭にいて、子どもの世話をしているのが一番幸せだ。	.49	-.11	.21
女性も男性も、職業に関して平等な機会を与えられるべきだ。	.11	.90	-.11
男性と女性は平等に取り扱われるべきだ。	.12	.85	-.11
男性も女性も、家事や子育てなどを平等に担うべきだ。	.02	.75	-.12
女性にも男性と全く同じような仕事のチャンスが与えられるべきだ。	-.14	.65	.20
男でも女でも同じ仕事に対しては同じ賃金が支払われるべきだ。	-.13	.62	.18
出席や育児が、仕事をする女性にとって、きまがけにならないようにするべきだ。	.01	.55	.02
夫が家事を助け持たせ、妻が働きやすいと思おう。	-.15	.45	.09
3歳になるまでは母親がそばにいてやるべきだが、子どもの成長には必要だ。	.05	.06	.60
愛情があれば、家族のために家事をすることは悪くないはずだ。	-.07	-.04	.59
母性愛は、女性にも自然にそなわっているものである。	.07	.13	.55
夫が安心して仕事に全力投入できるように、交えるのが妻の役割である。	.39	.01	.42

第1因子：「女性の固定的役割肯定」 第2因子：「男女共同参画への反対」  
第3因子：「女性の家庭への愛情肯定」

② **文化的自己観**

信頼性係数は、「評価懸念」.79、「独断性」.76、「個の認識・主張」.79、「他者への親和・順応」.72である。

表2-2 因子分析：文化的自己観(相互協調性・相互独立性)

	1	2	3	4
相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる。	.85	-.09	.06	.01
人が自分をどう思っているか気になる。	.84	-.09	.04	.02
他人と接するとき、自分と相手との関係や地位が気になる。	.53	.08	-.02	.00
何か行動をするとき、結果を予測して不安になり、なかなか行動に移せないことがある。	.51	.25	-.34	.08
自分について思うのは、他人の自分が自分の考えを何とおもうか知らない。	.03	.73	-.04	-.22
たいていは自分一人で物事の決断をする。	.05	.58	.05	-.02
自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じたことを守り通す。	.17	.54	.21	.02
自分の考えや行動が他人と違ってもいいからいい。	-.21	.53	.08	.04
良いか悪いかは、自分自身でそれをどう考えるかで決まると思う。	-.03	.43	.00	.36
一番親しい人は、自分自身で考えたものであると思う。	-.03	.43	.09	.26
いつも自信を持って発言し、行動している。	-.01	.03	.76	-.10
自分の意見はいつもはっきり言う。	.13	.15	.69	-.25
自分が何をしたいのか常にかわっている。	-.14	-.03	.57	.19
常に自分自身の意見を持つようにしている。	-.01	.22	.57	.11
仲間の中での相を維持することは大切だと思う。	-.05	-.05	.14	.69
自分の所属集団の仲間と意見が対立するのを避ける。	.14	.04	-.27	.53
他人の意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い。	.01	-.01	-.14	.50
自分がどう思っているかは、自分が一筋に思っている人や、自分のいる状況によって決まる。	.08	.11	.00	.49
人から好かれるには自分にとって大切である。	.33	-.19	.24	.46

第1因子：「評価懸念」 第2因子：「独断性」 「評価懸念」「他者への親和・順応」：相互協調性  
第3因子：「個の認識・主張」 第4因子：「他者への親和・順応」 「個の認識・主張」「独断性」：相互独立性

③ **キャリア動機**

信頼性係数は「ソーシャル・サポートの認識」は.79、「仕事における男女平等性期待」は.75、「自信があるが足を引っ張られる感」は.72である。

表2-3 因子分析：キャリア動

	1	2	3
自分のことをよく理解し、将来のことでアドバイスや助言を与えてくれる人が、社内に大勢いる。	.78	-.02	-.15
自分のことをよく理解し、将来のことでアドバイスや助言を与えてくれる人が、社外に大勢いる。	.77	-.03	-.12
自分のことをよく理解し、将来のことでアドバイスや助言を与えてくれる人が、家族に大勢いる。	.58	.11	-.11
女性は男性とまったく同等の昇進の機会を持つべきである。	.02	.77	-.08
女性は男性とまったく同等に教育研修に参加するべきである。	.02	.76	-.05
女性は男性とまったく同等に異動をするべきである。	.00	.65	.15
女性は男性とまったく同等の仕事を担当するべきである。	.01	.62	.02
同僚の仕事仲間と足を引っ張られることがいつもである。	-.29	.07	.69
異性の仕事仲間と足を引っ張られることがいつもである。	-.19	-.04	.62
自分の管理能力(企画力・判断力・統率力)は非常に高い。	.37	-.02	.49
自分のパーソナリティ(性格・個人属性など)は管理職として(管理職になる場合に)適している。	.38	-.06	.46
自分は自己のキャリア目標に向け自己啓発の努力を一人一歩している。	.34	.07	.45

第1因子：「ソーシャル・サポート」 第2因子：「仕事における男女平等性期待」  
第3因子：「自信があるが足を引っ張られる感」

## 2 各尺度の平均点算出（熊本県と全国男女別）

各尺度の平均点を表3に示す。「固定的女性役割肯定」は全国男性と全国女性で有意差がある。熊本男女は同じである。男性同士また女性同士に有意差はない。「個の認識・主張」は、全国男性と熊本女性で有意差がみられる。「他者への親和・順応」は熊本女性が最も高く、熊本男性は最も低く、女性と有意差がある。

表3 尺度得点表

	全国男性 =291		熊本男性 =170		全国女性 =230		熊本女性 =135	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
固定的女性役割肯定	3.46	0.89	3.36	1.03	3.22	0.91	3.36	1.00
女性の家庭への愛情肯定	4.39	0.87	4.24	0.94	4.23	0.92	4.23	1.13
男女共同参画肯定への反対	3.10	0.93	3.13	0.92	2.89	0.94	2.91	0.92
年齢	45.27	13.28	44.36	12.96	44.51	13.52	43.01	12.46
未婚ダミー	0.35	0.48	0.34	0.48	0.51	0.50	0.46	0.50
子どもなしダミー	0.42	0.49	0.35	0.48	0.53	0.50	0.47	0.50
大卒以上ダミー	0.58	0.49	0.48	0.50	0.33	0.47	0.35	0.48
評価懸念	4.16	0.85	4.07	0.95	4.29	0.91	4.32	1.10
独断性	4.32	0.66	4.40	0.72	4.41	0.76	4.31	0.84
個の認識・主張	4.30	0.86	4.24	0.90	4.12	0.84	3.98	1.00
他者への親和・順応	4.47	0.70	4.31	0.79	4.62	0.60	4.72	0.72
ソーシャルサポートの認識	3.95	0.89	3.87	1.11	4.02	0.98	3.96	1.12
自信があるが足を引っ張られる感	3.68	0.85	3.67	0.84	3.41	0.89	3.37	0.91

## 3 重回帰分析結果

性別役割分業意識への影響要因を検討するために、性別役割分業意識 3 尺度を被説明変数、文化的自己観 4 尺度、キャリア動機 2 尺度（「仕事における男女平等性期待は重複の可能性を考慮して除く」）を説明変数とした重回帰分析を行った（表4）。結果を以下に示す。

① 「個の認識・主張」：いつも自分の意見をはっきり持ち、何がしたいのか分かっているなどを示す。全国男性のみ「男女共同参画への反対」に有意な負の影響を示し、「女性の固定的役割肯定」には、全国男女のみ負の影響を示した。つまり、主体的意識の高さは女性役割や男女共同参画への反対を低めると考えられる。しかし、熊本男女は影響を示していない。

② 「独断性」：自分が周りと異なっても気にしない、正しいと思うこと守り通すなどを示す。「男女共同参画への反対」に全てのグループで負の影響を示し、男女共同参画推進は独断性の高い人によって肯定されることが分かる。特に熊本男女の影響が大きい。

③ 「他者への親和・順応」：仲間との和を大切にし、対立時には相手の意見を受け入れる意識や姿勢などを表す。全てのグループにおいて「男女共同参画への反対」に負の影響を示し、男女共同参画推進は協調性の高さが関係していることが明らかになった。また、「女性の家庭への愛情肯定」へは、全国女性以外は影響がある。男女共同参画が進まない理由のひとつは、日本では男女ともに女性が家庭へ愛情を持つことは当然と

の考えを持つ人の多さが指摘されるが、「他者への親和・順応」が男性および熊本女性の「女性の家庭への愛情肯定」を高めることは明らかになった。熊本女性の平均値が高く、熊本の男女差の大きさが注目される。

④ 「自信があるが足を引っ張られる感」：管理能力に自信があるが、他者に足を引っ張られている感があるという意識を表す。全てのグループの 3 つの尺度に正の影響を（熊本男性の「男女共同参画への反対」を除く）を示す。女性の性別役割分業意識に正の影響を示すのは、男性中心労働社会の中での女性の諦めや葛藤、さらには他の女性への願望とも考えられる。熊本男性の「男女共同参画への反対」に影響がないのは、そのような人は「女性の家庭への愛情肯定」女性の活躍に関係ないと考えているからであるとも捉えられる。

⑤ 「ソーシャル・サポートの認識」：自分をよく理解し、アドバイスをくれる人が社内外や家庭に大勢いると認識していることを示す。全国男女のみ「男女共同参画への反対」に影響を示すが、男性は正、女性は負の影響となっている。先行研究で女性のサポートと活躍の正の関係が指摘されており、女性へのサポートの重要性が確認されるが、熊本では影響を示さない。

表4 重回帰分析 被説明変数：性別役割分業意識 3尺度

固定的女性役割肯定				
	全国男性	熊本男性	全国女性	熊本女性
年齢	.18**	.24**	.00	.01
未婚ダミー	.09	-.15	-.01	-.08
子どもなしダミー	-.10	.13	-.14	.17
大卒以上ダミー	-.12*	-.18*	-.02	-.21*
評価懸念	.27***	.11	.15	.23*
独断性	.12	-.06	.00	.01
個の認識・主張	-.22**	-.15	-.19*	-.06
他者への親和・順応	-.19**	.11	-.14	.10
ソーシャルサポートの認識	.19**	.09	-.01	-.08
自信があるが足を引っ張られる感	.39***	.39***	.29***	.44***
R <sup>2</sup>	.29	.25	.14	.17
***p<.001 **p<.01 *p<.05 VIF=1.02 - 2.12				
女性の家庭への愛情肯定				
	全国男性	熊本男性	全国女性	熊本女性
年齢	.15	.20*	-.05	.06
未婚ダミー	-.01	-.07	.00	-.08
子どもなしダミー	-.11	.05	-.13	.19
大卒以上ダミー	-.04	-.18*	-.11	-.22**
評価懸念	.11	-.19*	-.04	.15
独断性	.11	.03	.04	.14
個の認識・主張	.02	.03	-.11	-.02
他者への親和・順応	.27***	.47***	.15	.26*
ソーシャルサポートの認識	.07	-.07	.15*	-.05
自信があるが足を引っ張られる感	.21***	.19*	.20**	.29**
R <sup>2</sup>	.30	.21	.10	.23
***p<.001 **p<.01 *p<.05 VIF=1.07 - 2.42				
男女共同参画への反対				
	全国男性	熊本男性	全国女性	熊本女性
年齢	-.06	.13	.03	.07
未婚ダミー	.00	.00	-.13	-.08
子どもなしダミー	-.01	-.03	.04	.13
大卒以上ダミー	-.13**	-.07	.03	-.11
評価懸念	.04	.03	.12	.01
独断性	-.19**	-.35***	-.17*	-.32***
個の認識・主張	-.32***	.00	-.14	-.18
他者への親和・順応	-.47***	-.40***	-.40***	-.33**
ソーシャルサポートの認識	.24***	.13	-.15*	-.05
自信があるが足を引っ張られる感	.16**	.04	.19**	.19*
R <sup>2</sup>	.45	.30	.30	.36
***p<.001 **p<.01 *p<.05 VIF=1.03 - 2.42				

## 【考察・今後の展開】

他者や社会への関わり方に対する認識がどのように性別役割分業意識に影響を与え、どのように地域の価値観と関係しているかを考察する（図1）。

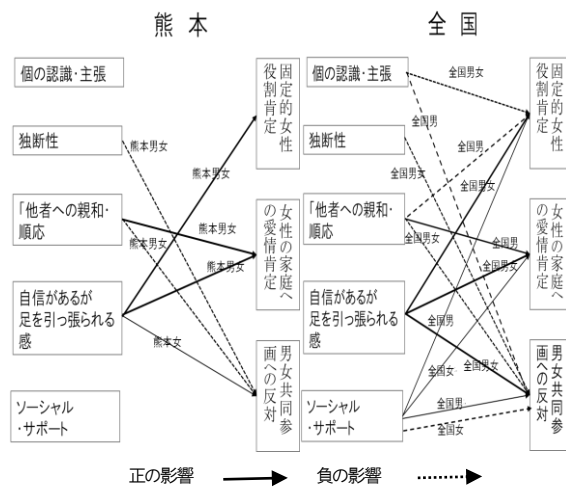


図1 主な重回帰分析結果 熊本・全国比較

全国では「他者への親和・順応」「自信があるが足を引っ張られる感」「ソーシャル・サポート認識」が性別役割分業意識の各3尺度に影響を示すが、熊本は「自信があるが足を引っ張られる感」のみ3尺度に影響を示す。熊本は全国に比して影響因子が少なく、男女同様の影響を示す。他の一県との比較が必要ではあるが、影響要因が地域で異なることが明らかになった。

以下、熊本県の特徴について文化的自己観をもとに考察する。「固定的女性役割」や「女性の家庭への愛情肯定」に影響は低い、それぞれの自己観の影響から、以下について明らかになった。1 つめは「他者への親和・順応」が高まると「男女共同参画への反対」は低まる。「他者への親和・順応」は、仲間との和を大切に、対立時には相手の意見を受け入れることを示すが、熊本男性の得点は低い（全国男性との差は有意傾向を示す）。反面熊本女性の得点は高く、熊本男性と有意差がある。このことから、男女共同参画推進のためには熊本男性の「他者への親和・順応」を高める必要性を指摘する。2 つめは「独断性」が「男女共同参画への反対」に大きな負の影響を示すことをあげる。自分が周りと異なっても気にしない、周りがなんと思おうと自分が正しいと思うこと守り通す人が肯定する傾向を示した。しかし、このような意識を持つ人以外も男女共同参画を肯定する社会が望まれる。3 つめとして「個の認識・主張」が、熊本男女はどの尺度にも影響を示さない。自分の意見をはっきり持ち、何がしたい

のか分かっているなどを示し、全国では性別役割分業意識を低める結果が示される。しかし熊本女性は低く、全国男性と有意に、熊本男性とも有意傾向で差がある。自律性を示唆する「個の認識・主張」の意識を高めることは、熊本の「固定的女性役割肯定」と「男女共同参画への反対」を低める可能性が示唆される。

以上から、熊本の性別役割分業意識の得点は高いとは言えないにもかかわらず、男女共同参画推進や性別役割分業意識解消に課題を抱える背景には、男性の「他者への親和・順応」の低さや「独断性」の影響が要因としてあげられる。それは「もっこす」「肥後の引き倒し」意識との関連が窺われ、そして女性の「他者への親和・順応」の高さと「独断性」の影響は忍従の生活を強いられただ中で立ち上がった「肥後猛婦」の精神を浮かび上がらせる。つまり、男女共同参画への心理的阻害要因には、地域の歴史文化にもとづく個別の価値観が関係していることが明らかになった。今後は他の影響要因の考察を行うことで男性中心の労働社会の課題を明らかにし、自律性や多様性を尊重するための施策や教育に関する提案を行いたいと考える。

## 【引用・参考文献】

- 大宅壮一(1967)「熊本の猛婦たち」『大宅壮一の本7 女の盲点と美点』サンケイ新聞出版局
- 金井篤子・佐野幸子・若林満(1991)「女性管理職のキャリア意識とストレス」『経営行動科学』6(1), 49-59
- 北山忍(1995)「文化的自己観と心理のプロセス 特集 異文化間心理学と文化心理」『社会心理学研究』10(3), 153-167
- 小林隆一(2008)「九州地方の県民性」『地域総合研究』第35巻 第2号, 61-66
- 齋藤 香・竹内 淳一郎(2017)「当地における人手不足の現状と課題1」『熊本地震関連特別レポート』vol. 2
- 高田利武(2000)「相互独立的-相互協調的自己観尺度に就いて」『総合研究所所報』(8), 145-163
- 武石恵美子(2016)『キャリア開発論』中央経済社
- 武石恵美子(2007)「マクロデータでみる女性キャリアの変遷と地域間比較」『生涯学習とキャリアデザイン』キャリアデザイン学会, 19-34
- 橋本由紀・宮川修子(2008)「なぜ大都市圏の女性労働力率は低いのか」『独立行政法人経済産業研究所 RIETIDiscussionPaperSeries』08-J-043
- 大和礼子(1995)「性役割意識の二つの次元」『ソシオロジ』40, 109-126
- 渡辺京二(2012)『熊本県人』言視舎